

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 4 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530192

研究課題名（和文）B・バウアーの大衆批判——その歴史的位相と後期近代的位相

研究課題名（英文）The criticism of the mass of B. Bauer in the historical phase and the late modern phase

研究代表者

田村 伊知朗（TAMURA ICHIRO）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10222126

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ブルーノ・バウアーの純粹批判の哲学における大衆批判の意義を歴史的位相と後期近代的位相において定位することにある。前者の観点から、純粹批判を受容した周辺ヘーゲル左派、すなわちヘルマン・イエリネック、テオドール・オーピッツ、カール・シュミットの文献目録並びにその思想史的意義を確定した。後者の観点から、コンディリスの思想を研究した。純粹批判が後期近代において位置づけられた。

研究成果の概要（英文）：This research is aimed at identifying the generative significance of the mass criticism and the pure criticism (=die reine Kritik) of the young Bruno Bauer in the philosophies of other thinkers both in the historical phase and in late modern times. And the philosophies of the other young Hegelians, such as K. Schmidt, H. Jellinek and Th. Opitz, have been studied from the former viewpoint. The point of this study is furthermore, not only to research their philosophy, but also to complete their bibliography. I studied the mass theory in the sociology of P. Kondylis from the viewpoint of latter.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：ブルーノ・バウアー、ヘーゲル左派、コンディリス、純粹批判、テオドール・オーピッツ、ヘルマン・イエリネック、カール・シュミット

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、ブルーノ・バウアーの哲学的な方法論としての純粹批判とその中核をなす大衆論を考察対象にする。そのためには、以下の異なる二つの学問的方法論が必要とされる。第一に、バウアーの純粹批判をヘーゲル左派論争史ならびにドイツ三月前期という19世紀中葉における歴史的状況に定位す

ることである。第二に、現代の大衆民主主義的観点から、その哲学的方法論と大衆論を再検討することである。

(2)まず、前者に関して述べる。バウアーの純粹批判は、彼自身の思想的発展において自己意識の哲学を批判的に再検討することによって成立した。後者は、マルクスの思想発展において重要な鍵概念となり、研究が進展し

たことと対照的に、前者はマルクスだけではなく、エンゲルス、ヘス、フォイエルバッハ等の著名なヘーゲル左派によって決定的に批判されたことにより、思想史の舞台から排除された。彼らの批判を前提にして、その意義が看過されてきた。バウアーの純粹批判は、彼らの思想的発展を正当化するための踏み台でしかない。

(3)しかし、純粹批判はそれだけにはとどまらない現代思想の源流としての意義を有している。この意義を確定するためには、当然のことながら、マルクス、エンゲルス、ヘス、フォイエルバッハ等の論争をバウアーの純粹批判の立場から再検討されねばならない。さらに、他のヘーゲル左派、とりわけ「神聖家族」に属するセリガ、レッサー、ヘルマン・イエリネク、テオドール・オーピッツ、エトガー・バウアー、カール・シュミット等の純粹批判解釈と、バウアーの純粹批判との同一性と差異性が確定されねばならない。

(4)また、この作業は、ヘーゲル左派論争史に限定されてはならない。A. エスターマンの業績を参照することによって、同時代的コンテキストに埋め込まれねばならない。バウアーの純粹批判はヘーゲル左派に限定されることなく、ドイツ三月前期総体の時代精神に定位される。

(5)次に、後者に関して述べる。純粹批判の哲学の中核をなす大衆概念は、後期近代における大衆概念の源流として位置づけられねばならない。大衆は19世紀以前のように、現存する社会的実体を変革する主体になることはない。もはや、彼らはその実践性を奪われている。大衆は近代を創造したが、形成された近代においてその社会変革の実践性を喪失している。近代という時代が大衆を必然的に産出するがゆえに、近代の揚棄も不可能になる。バウアーの純粹批判は、この意味を初期近代において明瞭に描き出した。

2. 研究の目的

(1)本研究は、ブルーノ・バウアーの純粹批判の哲学における大衆批判の意義を歴史的位相と後期近代的位相において定位することを目的にしている。この哲学をドイツ三月前期という歴史的状況において考察すると同時に、その意義を後期近代の大衆理論との連関において位置づけようとする。

(2)その際、研究対象とされたのは、研究史においてほとんど看過されてきた周辺ヘーゲル左派である。すでに研究がほぼ終了してい

る中核的ヘーゲル左派と異なり、一群のヘーゲル学派が研究史における欠落として残されている。彼らを本研究の中心におくことによって、その研究史的意義が明瞭になる。

(3)後者においてコンディリスのポスト・モデルネと大衆民主主義の議論に焦点をあてながら、バウアーの純粹批判とその中核をなす大衆批判の意義を解明する。

3. 研究の方法

(1)収集された文献の解読が主要な課題になる。また、バウアーの著作目録は整備されているが、その周辺ヘーゲル左派、カール・シュミット、テオドール・オーピッツ、ヘルマン・イエリネク等の著作目録が整備されねばならない。それに基づき、伝記的事実が解明されねばならない。純粹批判を中心とした三月前期の思想状況を解明するためである。

(2)本研究は、この3年間という研究期間において、これらの課題を論文という形で遂行してきた。また、その序文を付すことによって、その意義を確定してきた。とりわけ、偏向してきたヘーゲル左派研究史において、彼らの思想を位置づける意義を明白にした。日本語版「初期ブルーノ・バウアー著作目録及びその序文」、「初期テオドール・オーピッツ著作目録及びその序文」、「カール・シュミット著作目録及びその序文」が整備された。彼らに関する研究基盤が整備された。

(3)もちろん、これらの業績は、日本語で執筆されているという限定性を有している。しかし、それは将来ドイツ語で公表することを前提にしている。その形式も日本の学会ではなく、ドイツの学会における妥当性を前提にしている。ドイツ語での公表が前提にされている。

(4)さらに、収集された資料は、文献に留まらない。リーシュタール詩人=都市博物館（スイス連邦共和国・バーゼル州）には、テオドール・オーピッツとブルーノ・バウアーの往復書簡集の一部が保管されている。とりわけ、後期バウアーと後期オーピッツ往復書簡は、初期ニーチェとも関連している。この意義は本研究と直接的な関係を有していないが、近代思想史における研究されていない深淵に属している。この意義の一端に触れたことは、今後の研究の進展にとって有意義であろう。

(5)大学アルヒーフから収集された資料もまた、通常の図書とは異なる研究史的意義を有する。とりわけ、カール・シュミットが学ん

だハレ大学に講義記録はとりわけ有意義であった。また、ベルリン大学アルヒーフに保管されているカール・シュミット関連史料も有益である。その読解もまた、今後の課題の一つになろう。彼のラテン語の博士学位請求論文もまた、ハレ大学図書館ではなく、大学アルヒーフに保存されている。大学アルヒーフを渉猟することが、周辺ヘーゲル左派の基礎的基盤、とりわけその文献目録作成に対して寄与した。

(6)また、後期近代の大衆論を、コンディリスを中心にして解明する。また、エスバッハ等の集団社会学の討究によってコンディリスの独自性を解明する。

4. 研究成果

(1)神聖家族と総称されたオーピッツ、シュミット、イエリネク等の学術的な研究基礎が整備された。彼らは、マルクス、エンゲルスの『神聖家族』、『ドイツ・イデオロギー』において根底的に批判されたことによって、思想史の舞台から退場する。

(2)しかし、前世紀後半における所謂マルクス主義の権威失墜によってマルクス、エンゲルスの神格化が失墜したことによって、彼らの思想史的意義が再度注目されることになる。神聖家族構成員の思想史的意義が解明される基礎が構成された。彼らの思想ではなく、その代替選択肢としてブルーノ・パウアーの初期思想を討究してきた。彼の思想を受容したイエリネク、オーピッツ、シュミットの思想を討究してきた。彼らに関する研究基盤である文献目録を整備してきた。とりわけ、シュミットに関する文献目録は、初期シュミットに限定されず、後期シュミットにまで及んでいる（田村伊知朗「初期カール・シュミット(Karl Schmidt, 1819-1864年)研究の基礎構築——その著作目録(1845-1863年)の研究史的意義づけ」『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』第64巻第1号、2013年刊行予定参照）。

(3)パウアーの純粹批判と大衆批判の意義が後期近代における思想、とりわけ大衆社会あるいは大衆民主主義との関連性において明白になる。

(4)また、コンディリスの思想史的意義の一部が解明された。大衆民主主義に関する彼の思想、ならびにグラツイス等の一般的大衆概念が解明されることによって、後期近代の時代精神もまた解明された。大衆が社会において支配的である。近代社会はそれ以外の選択肢

を持ちえない。そのかぎり、社会のある特定の部分、たとえばプロレタリアートのような特定の階級が、近代の揚棄の主体になることはできない。

(5)コンディリスによれば、相互に結合、分離可能な原子化された諸個人は後期近代における大衆民主主義社会の指標である。諸個人は自然的規定に基づく社会的ヒエラルヒーを形成するのではなく、労働者としても消費者としても極限まで差異化される。すべての個人は細分化され、広大な社会システムの一単位でしかない。

(6)もはや、初期近代におけるブルジョワジーとプロレタリアートの階級対立も、後期近代において中核的現象ではない。諸個人はプロレタリアートと総称されるに至らないほど細分化された社会的役割を担っている。後期近代が平等原理によって貫徹された大衆民主主義として叙述されている。

(7)後期近代において支配的な社会認識と大衆認識の先駆的形態としてパウアーの大衆論を位置づけることができる。この後期近代におけるパウアーの純粹批判の位置づけに関して、ドイツ語論文において詳細に論じた（研究成果[図書]①参照）。それに対して、ヴォルフガング・エスバッハ等による好意的評論があった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①田村伊知朗、初期テオドール・オーピッツ研究の基礎構築——ヘーゲル左派研究史におけるテオドール・オーピッツ初期著作目録(1842-1850年)の意義、北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)、査読無、第63巻第2号、2013、29-41。

②田村伊知朗、ドイツ三月前期におけるヘルマン・イエリネクの宗教批判と政治批判——ブルーノ・パウアーの純粹批判との関連性における思想史的考察、『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』、査読無、第62巻第2号、2012、15-26。

③田村伊知朗、初期ブルーノ・パウアー純粹批判に対する周辺ヘーゲル左派による基礎づけ、北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)、査読無、第61巻第1号、2010、99-109。

[図書] (計1件)

- ① Tamura, Ichiro, Die Massenkritik des jungen Bruno Bauer und ihre Bedeutung in der späten Moderne. In: Hrsg. v. Klaus-M. Kodalle u. T. Reitz: Bruno Bauer (1809-1882). ein „ Partisan des Weltgeistes “? Würzburg : Königshausen & Neumann, 2010, 375-384. 査読有.

[その他]

ホームページ等

<http://kensoran.hokkyodai.ac.jp/huehp/KgApp?kyoinId=ykbggggggb&keyword=>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田村 伊知朗 (TAMURA ICHIRO)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号 : 10222126

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし